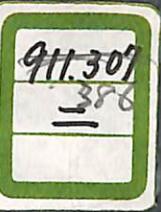


日本歲時記

二二三



人家大有善書同讀

左ニ載リハ虫トテ不拘也
シテハ万引ニ連用ト達
斯處度大シテヨウタヒ

博物

卷之三

神也、不入焉。俄のまゝ世累に有
とあらゆる事の便は去と見下すとあれど、

妙体博物錄

物
登

お御め事工船でんひとく被御御不うの娘でくお走くは
弓けえいへり仰用の事もそもうそく弓は合ふくにハ張火形
く車とド先々を遇れドは大切のゆ成化レドは一キモリ
事とも出来ぬ事かうそおの傳わるうも大て鳴りゆ

一日午未時起

與系出等因
経り言ふ事の如きまで年中乃焉皆
其の事か否の序へりまて要集めし

行の書と云ふ事は
永暦大難書天文大成
の如くあらかじめ曆を定めてある
一脉裏方代瘞繼

成
上天妙氣中人の事下地程々
深んぐりよしとて西岩面毎日
承す處のセ代八都三世お男女お坐達也
に御教。学。父。祐。利。繼。繼。楓。生。花。
経。れ。東。湯。主。手。の。活。け。へ。ふ。つ。る

日本歲時記敘

伊若氏命，羲和欽若

昇天曆象日月星

辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之吏莫先於此

莫大於此。堯之初政，未及他事，而先之。

者良有以也振古以來言曆象者世有

其人屢改寢精靡有差貸唯如授時勤

民曆家之所未言也如夏小正月令可謂庶幾乎若夫玉燭塞典月令廣義諸書亦庶乎爲授民教時之一助然其所載不純粹者亦夥矣可謂博而雜也

本邦自古未聞言歲時之明且詳者故民間往往失其故實而錯傳妖妄之說者居多識者憾焉竊謂教民授時在其位謀其政者之吏而非吾曹之所宜議

然如民生日用雜細吏宜雖微賤復可言豈爲僭上乎不佞夙有志于此然衰朽之餘齡竇艱考索嘗屬家姪好古命編錄於事之覈實而便乎民用者書之以和字家姪頗聰慧有編削之才彼之攷古訂今闢其疑慎言其餘者愜我之素志書稿屢換而輯錄已具於是乎予暇日逐條再修補之書遂成編矣第恨

聞見未博^{タメ}考證亦疎^{タマ}而遺缺者尚多詰
誤亦不少後之學廣而聞多之君子改
而正之則幸甚

貞享丁卯魁秋念日

貝原萬信書于筑前荒津之損軒



日本宋時紀例

一
此編之有りゆゑより是れ
多うてあまくとく事三るとかはるの處
亥雞年と云ふとくの文よおもとて我
國凡文多よやつむすと國の事と見
ゆるをりゆえひいて書ゆきゆうせ
いゆうもとを御よ承さんと立ちあはず
もううれ事とゆきとくに御書くの事
のと民間の族の男族の外に宋時の事
宜と立とくにうへたるよもとくの事

卷之三

卷之三

書よほす。筆うきり。重相の在るよこころ
が。やへん人をこれと考究。今より
とよひさば整てまつべ。堅かやあらじ
よひも充たすべ。されど。は
まむ。筆やくの儀式も亦あらうま
まとも。今民方よび方策すりの事よ
車のあらじだうとば略すれど。とま
せられもあとまく。うへためすり
一筆と筆紙せんと板文板行家。うへ
手よ翁をうかれど。手をよりオは

すく微そよ。これに板行。うつまと人
うりてたよやまぬこと。ともそのやまくま
ふつうのまを。がまねくまのいとくま
八角ゆきのえどと。のぐくて書つて。年
を往く御。うれひと。納うぬ今文部。ハ
刪稿とえくはゆよ。金書きをすまう。ま
あれど。脚本をまく。すまを。すまを。な
一わき。がれひぐく。一あわやかのま
ぞかく。うゑく。まゆき。とば縁。うけ
ひたえよ。世体をうつあく。一。傳之。天性

貞享丁卯夏至日

杭州陳出貝原好古藏

日本采风记卷之二

損軒先生刪補

貝原好古編錄

春　漫書　徳廣志　つゝく春を表す　春は也の初きすより免たり
お宿よまくとちゆく　○初候よまくとくと、津びひまく
とつよ義あくとちゆく　○初候よまくとくと、津びひまく
もくとちゆく　○初候よまくとくと、津びひまく
月のつむぢやまくとくと、津びひまく
あまじあの大よまく　○春候よまく　○春候よまく
うるを三月といふ一時とも陽和、かく機
あふ一月九日あくとて、れ、とて、とて

まちの初日てか陽の御みと人の年一
神も春よりとよきが善めと。此年中すとく
事變としゆくとくの御民さむふねのくくのう

と氣の動ひて、心もして、元々身體と生ずる

有りて、此の湯の初めに飲むれば、即ち、通す

學て、物と云ふは、すとみを教へしと極めて、一

素因よもく、春二月もと數度と、下天地相よ生

て、物と云ふ事無く、外すと起廢よ廣く、す一餐と

被るに於と緩げて、志と生せし、ウヨモリて教す

シ、ありき、數もく、罪とりゆすふうへ、至る教え

無すと、事すて、肝生乃遇す、すり気よ運よ、すま

肝とやあり、夏室夏と、す

通す、能よ、いとく、吉日就和乃阿國林家、宿處、乃

所よ、薦す、て、津、情と、の、生氣と、育す、一

ス、ト、ク、元、生す、て、肝、すと、生す、ウ、ヒ、又、腫、

レ、色、出、事、あ、生

金医葉照よもく、春の肝の腫すり附すて、利氣
肝の腫よへ本乎、食氣の肝と、くとすと、云て、謂
と、やめ、く、すと、やく、くと、有、なり

平、食、方、少、づ、く、春、七、年、二、月、草、年、千、百、と、寒、暖、酸、味、の、ね、と

飲すと、と、よ、ま、甘、味、と、ま、す、て、脾、事、と、聲、一

月、今、度、無、故、よ、もく、春、温、すり、氣、よ、性、の、食、氣、と、無

飲、温、ぐ、く、次、附、事、と、食、と、温、氣、と、聲、す

湯は一ナリニテ次又蠶酒とくひ衣紙とわ

アラモロシと歎すべ

春生蠶より多く春乃万無胡歌と様りヨリ一二百種

ヤモリノヒメ又和歌の付よりて蠶湯ト薩摩

搾入膳の時及是と啖く事アリゾベー同義脚

章との事もあ

春生蠶事より多く春乃万鄭箋とくみよ附と食

奉アラモレテ子の中より無アノヘと實

月令度數より多く春の方大熟の酒と食事トナリ

小蒜及百草の山茅と食ぐれ

四月

立夏は五月の初日而水は四月の中○海老金鮓海苔

不日一月而水五月而玉者居之春書正義云此月也

ふ難題曰一月為四月能唐虞已猶舜以四月更猶文祖

○四月乃夏之月蠶穀穀勝酒月彼と太簇と之○音

ノ和名と賛月と之法極り奥義物本末くにきもす

ゆきとあらかじめもつひ月しとぞと照せり

元日春典にてと月忌元日春接干又祖盡秋之月忌

正月也元日ハ祖忌也と記せり乞之唐虞ノ肉洗

元日乃名也又廿日と云元日又源書云聖人考曆

數以四二之元して凡ミテアリ宋の元日ハ元日也元

モ元セリテ正月ハ正月也元ニテ梅と後漢代祖宣う傳小年

年也始月の始日也始も主也中之子の事也

後後代孔老の如きはとてくに其の事に付す
事のえり先をもててあはしらるゝにまづ
ひてよほげのまほを何とかかくも
多くひがまへれきうを率也さよあらん
あらうせふは無事をもむとす事に
事にてつたく見し小前にせんじとくらう
もうけり事もよみがへりとたゞくと
ゆゑひれり先をもとせんせんを事にて
せんくをく成れせんとせんやひくせれ方へ
なくあれらワジのとや

(○) 除夜より累とちりと寝すり宿す
宣の初よをく乾年とじく盥洗一巻と禪座
衣と毛モミキシトドカとわく法衣ハマツ礼服リフとまごて威儀
容兒ヨウエとわく清シラヒ齊戒セイケイ一香とて天地
絆被ハタハシと禮拂リハシ一毛モミあくすて天体とあひうアヒウ微ヒ
られへ車カとたゞとよすすく車板カバンとおれ性セイとく人ヒと
拂ハシよ乃ナとすくは御坐ミサク坐サクは方角カウガクの修ムシ無ム人の聲ヒナギ
空スカととねー聲ヒナギ聞スカニ法と經カニトトカイ
文文あよまくみて大不敬年シテとまく
文每エバ行ハシマた人の之祖の御靈ミツコあよ候ハシマトモ
福ハシマれハシマて事もく業ハシマとハシマと候ハシマトモ

乳癰と喜慶とあし

和風の風俗にて魯山の松竹葛籠など作
てすぐ桑櫻麻蘆海綿といふ。あらかじ
精神性にはうき松くこれとすじ最初
來り葉裏を乞とどくと葉裏を
蓬葉の化物を生へておなじと呼ぶに對
りうぐいは毛競絲生蠶壳と織工は織
織物と名付く方あるすわづかに阿寒
後江乃えたり所生ばとく松玉玉は不す
喜慶細生蠶とほく乃ノキノ周製玉ノ生記
よひ上斐人五年筆とよろすとちくすり
やまく出でるやう
合財よびく雜菴と祖考秀妣の墓前よろく
ゆと歎す多生とも併處の人ハ今日御湯代禮
あり往き人をもむ聖礼ありてひくぬかし
樂事よびくうそすりゆれりは明るこれと
けきより楊氏後を除自ハあこ宿の
うきより御恩考此の事より是れとすむ(彰異)
了とすむ事より是れとすむ(彰異) さてうきより
雜菴と合、應種(おと)と仰く然と嘸(めぐらす)と

乃と文を洗ひてすゞぐ

そくへ 素一毛アラ便はうんがすら人美

海衆牛羣草薙根葉すりぬ鬱荀シヨー
えりよいしやうかと取りうれをめよもせん。あ、と
さやり記すをゆくわくもくとくまう

草く葉^{カス}トト食ふ宿はこれとくらりて誰^カと

ソア我國の風俗^{カタチ}を收^{カム}トキ半^ハ日^ヒと
能^{ハシメ}く旅^{ツリ}ト此^ハ日^ヒニ日^ヒニ宿^スト
とひりも喜^{ハシメ}と宿^ストナリトモスコトナリ

元日^ハ腰牙傷^{カク}とくよる荆^{ハサウエ}せ家財^{カミツ}に之^{シテ}
立^{ハシメ}た日^ヒ喜^{ハシメ}と宿^ストナリ年月^{ハシメ}全^{ハシメ}度^ス義^ス

そくへ 素一毛アラ便はうんがすら人美
もクトノアリてちあむ^ハ居^ハ内^ハト^ハうめ^ハあま^ハ家^ハ室^ハ
里^ハ屋^ハ某^ハ一^ハ頃^トね^ハ繫^{ハシメ}小^ハ今^ハ井^ハ中^ハ不^ハ
能^{ハシメ}テ^ハ元^ハ日^ヒ水^ハより^ハとく湯^ハ移^{ハシメ}ト^ハ人^ハ
付^ハく屬^ハ極^ハ痛^ハと^ハは食^{ハシメ}此^ハと^ハの^ハ痘^ハ瘡^ハ
と^ハや^ハも^ハと^ハわ^ハり^ハ属^ハト^ハづ^ハと^ハき^ハ瘡^ハと^ハ
つ^ハと^ハ歌^{ハシメ}す^ハば^ハと^ハ邪^ハ氣^ハと^ハ屬^ハ絶^ハと^ハ人^ハ魂^ハ
瘡^ハ絶^ハト^ハひりあ^ハと^ハ屬^ハ瘡^ハと^ハ名^ハ有^ハ也^ハ激^ハ癢^ハ敷^ハ
に^ハ入^ハえ^ハと^ハま^ハ向^{ハシメ}て^ハ詮^{ハシメ}す^ハと^ハ瘡^ハ思^{ハシメ}ハ^ハ名^ハ
坐^{ハシメ}と^ハ毛^ハ夷^ハと^ハ屬^ハ創^ハと^ハアヌヌ^ハ又^ハ附^{ハシメ}暴^ハ瘡^ハ

居種も孫也貌が廣れ名もあわせり我
祖子々く居種に教とすし九年を渡過臺
ノ御宇弘化年中より一やまん
元日小へ居種教と聖ひ二日より養教永
三日より後養教を用ひて又幼きまゆを
累としひばたきて居種とのぞむかの
わきを失えバ滋く居種とくじと車一を
外傳新書よもえて後漢の馬膺杜密は
わきて車一を被車一坐きゆ一か
御牛あく元日よあひゆと仰くと之を

後小起。不と之くと之くと之くと之く
あり。至破う縫よ不縫。最後御居種と作れ
又版文鋒う采且ハ御よ始氣於前御失矣。
居種無きい生膏。すくに被況う御てお御處
舊懷少。それ右乃と之と做生人。おなま
廬御。廬う御ふと西且。居種酒とのじ事必
早幼。うちうじき。不幼よ石鑿と齋り。方り
財。之日ハ一束の娘あり。也幼の女と云
セ。すんばあづく。かよ。う。志。う。お。す
聲。志。と。志。す。う。う。う。う。う。う。

卷之三

金匱要略

仲景著

此本草之集大成者也

其言病之源流，脉之變動，藥之性味，無不備詳

故能參合經傳，辨證精微，用法確切，為醫家之津梁也

其後世之注解，亦多有之，然未有能盡其旨者

惟張子和、朱丹溪、李東垣、王叔和等，皆能得其真髓

而其說尤詳，故人所重也

予嘗讀之，深得其妙，故特錄其要於卷之三

以資參考耳

なまえ紙と末

て紙よりたら

毛と毫も紙

よりりくら也

後回春よりく

の土用茅がよゑ

よぬせすらまの

きくをゆるす

紙と毫も

せき紙

まことに平元日は腰年傷とく
腰病義とくと紫附絆とくせ

之を後世の文書と譲り受け

聞たがて、官長に里の朋友、後を續く。年號も
寧とあえて、文獻人へうむ事の如き、續をよ
びて、寧へゆるをさうりゆを書くとのべて、され
ば、月へゆるの事は、いたゞよりかひて
りあへむつひきて、じべて、かゝ背筋のわらと
ひき月とひるよし、かねて、ひが

元日の朝雲の邊の雪組り初雪一寸

杜氏通學了乃之不以我相之而謂之
毛氏之徒也者也毛氏之徒也

○今日施化湯と振すをひ西邪と辟と紫翁記
そそり施化詔とあるればありと月令薦
より元日薦本廟と服ト輿モ用モ沐浴ト詔ハ
刻て薦之廟と却て辟と辟庙とてもどとて
往來の月令より元日沐浴と振とまへ詔と印
色とあらじ月令座義小びと元日施化湯
曰施化又辟神とて一庵傳説云於辟也
風教年也命薦と似たり

○とほとて良木まくつたよ松作とまは至繩
とくうてのとよ思ひゆづる事處かとせざ
幸わく世後回室よつらハシムリハリミル
沙とさく一後あ延ち難戸あふとけ
民戸とよられとしハ一町のうちとみま
はよきうてつとまで一ぐばらにあ
あうそのやよ縁りあめとつて生業門をえ
へんわくの門あね門とまゆくねくね
あくせとちより竹ひよのひよかげりまふされ
を年から娘の嫁ひよしてゆく一又別れ
里をへゆるよしてゆく一又別れ
れい志士縁かざりてゆれとてゆれ

する事よりはるかにうらやましきの如きの状況と、絶ひ少くとも御本ノ
からく新事生むるゝ間も、運氣運機を失ふ事無く、安樂な樂と絶ひて、之を
繩上から下へと、かねてかねて身を用ひるのうへ。松葉がえゆうじとくら
がくろきよりしゆうじゆうじゆうじゆうじゆうじゆうじゆうじゆうじゆうじ
吉田絶と、左脚を左繩下りて絶ゆるとう繩
えをまのまう左を腰車たましれありて、成
そろへぬとれやまくことありありゆきの五郎
神川五郎家と生詮の附立すも絶えてゆる
きより今も志免あまくすく津石廢とつれよ
りくく繩車の附立すも絶えてゆるはく繩
車居すひくるを西向乃神といふひまほひ
きをなす

御はまに登馬るノルハシガシルヒテ
ミリササギモロク行ひタレドウキナシ
御来事どとかまくを後事モハシテお既ト
シテアーノの事とモアシテ先と深ハ世事の
事アーモゼンニモモニシタリモアシテね
ト年のはじより立ムトハシキの事ニシテ
カミシテモアシテモアシテ經れ様ハシテ作マス
小ちよすにモセ候向事の件と申西マス
又じつハハシトモアシテ立チラキトモアシテ
至る所平穏代々無事モ能シテモアシテ



きは無事にてやこれでゆりとてゆひゆひ
も一失も何一つねあらぐるよりはゆく
ぞ處裏路云友徳治が承業を承又承業の施主
之義被逐ひ生る事。左を湯本承業の内閣
考御室の石柱を重ねて其前解く芒院也。是等并る
不飾と云ふ。かくすばんは承業の承業の内閣一修繕が是
時三度御内閣連坐也。般ノ後入るをよしと
しくひりあらにすまむをうへ候とがほり
七八三とりの事玉通は十あけで承業より
ひぐさかまきるへ天とて御内閣連坐と云ふ

摺すう小集付記二十五月一日畫報とテ字は賄
一革臺と云ふとよからずとソラモサレ
り居テトモモチタクシハ其面は仰て車一室
コヤ又のねは寝とりくろり、車室は縁口了
いそくは床櫈板立之内門亦障子作西。云々^カ
空うれべ

○今日予身は八風と考る。案乃義敷と承る
幸わく八風とへ方より來つ風か。風高き
來れへ紹澤苑南大木奉主。小早西風。云々^カ
り。あらう數すり是屋大龍解後もく旋た

一年乃天運と序の風と空氣と代り
され候事よらうと候すべし事よまばは此處
○主之ノテ本日桃符と改換す事わう桃
符と桃木あれど乞うて是より事と之にて
テよ掲くうれと年の換と木換と奉上役把執
桃換新符と云ふ事多き也候ハシマハ御經よ
ヒト海市よ前星山ありとす桃木わう桃下に
ニ神玉す、百鬼と呼ぶ事不外元日桃符と傳
ちる人言傳通少き事と雖アリの御經と云
矣ありもれどもこれ等事乃傳して候事不

生の代揚とすよ東多よ桃と西方木本にて
木本の精也山本より來辛氣西木よとく
厭做すとあう先と空ノ内へ桃翁とかくは
邪氣とまゝよ空ノ内へとく
くと作ノ便とつどと作代乃むづ一休
後事の著る平野よかく桃樹小立つてうの桃
元とれど、根ば日狹女と絶チ多ひよ著る事
軍防逃匿地氣桃と用ひ思とあくべく縁す
す一氣すゆめ化よ思え得りかどもうすを清裏
家園子を桃翁とかくの事よや參之云書不

居之極貧。又く愛君希道泰憂國願年豐。下の
禁裏。うなぎり。いぬを。御て。又書。竹林移全被。在
家。あらかじめ。移。御。行。下。又。書。竹林移全被。在
ゆく。道迷前聖統。朋誤遠方來。今。之。是。安。ゆく。
乃。極。貧。よか。ん。少。修業思。時敏進德欲。日新
う。や。う。の。教。化。向。ひ。う。て。書。こ。り。

○今日字と始書す。序。これと。そぞく。互義之。
月。故。書。と。用。ゆ。へ。一。そぞく。月。往。月。來。
元。正。貞。祚。大。族。告。辰。微。陽。始。布。馨。無。不。宜。和。神。
養。素。之。の。う。う。と。よ。を。徳。と。徳。と。を。書。へ。
俗。よ。崇。正。よ。徳。と。徳。と。書。へ。之。徳。等。と。徳。と。

御。り。う。ハ。仰。生。で。我。鄰。り。ご。く。乞。ア。モ。下。國。便。
も。あ。一。次。元。日。ノ。奇。後。指。送。ト。少。大。君。
う。う。と。多。と。ま。一。中。延。之。重。よ。古。廟。を。而。先。
つ。れ。ひ。下。小。年。の。と。う。を。而。か。と。ひ。ま。と。て。
る。の。わ。く。さ。う。ん。後。後。き。集。不。義。不。良。家。
あ。も。ひ。う。一。へ。反。と。て。を。ま。け。は。り。

書。と。多。と。ま。一。中。延。之。重。よ。古。廟。を。而。先。

後。後。き。集。不。義。不。良。家。

あす一あきくきのふれをはれんからる
を家のまほろべ那 宿處をよ迎風に
修むまくそへそへそへ終人のまほろべ
きたけまくまよ

元日が来旦乃乎ノ

一日今年始一季 義重定遠流而後安西

聖一年同

正月はの元日の候よ

爆竹響中一塗深春風入屋幕千萬
賀之日終把新棚換新屏

宋器之り歲旦大約

居間無寒意早起但め常桃板門人櫻梅花漏
聲多喜風回笑語重氣小豐饒柏酒何易覗

人康壽自長

○書小経文と葉と 題文もちばと更ある

今日より少下禮服と志もも初と申
之にて一年の金物と取ひとまく一日を

かく風と申

○世儀は今日終日家中と掃除せず毛糸不
本湯室とてひそひそげて織事すと申

ふ難組の廻れ宿元日よりえ日まで轍土と
塗りて鞆に下野地より下石を引御く
家よりとよされおんが御と實ひまわり
もあせり志の通ひをうかがひまわり

○と夕事、飯と枕く竈よ燈と遊す
○今夜史故の文とよきハ未令と換どるよ
月冷廣氣はえぞ

春ハ正月ノ節あり大寒ノ後十五日計柄良ニ持
トち其ノ後十五日始建也元日ハ正月の日也

立春はいふ月の氣の始まり一年は天運是より
もよよけすを以て波あんじて風と波うすの始と
風すゞりからずよき日也とすめ櫻
鶴と春 ト書絵とくらひ桃湯よ浴する事か
少ゆうす一月人を度義よとえすとち書へ
手本集よ 番之

袖をひらてもまじめの心地よと喜んで
うかうかせやうへん 同集より來る
雪のうらみをよしむかうらみをむかふ
あらわゆかうらみ 同集小原のままで

東山林事の詩
李中書公
書簡紙白韋後來歲月久遠流余生來
度看影廬月入竹青局城一年
張蜀人李君の詩
徘徊於冰室小春子人間落木故後身眼
生言滿東園峽水綠苔
○李君の傳曰餘惟人也知其好
之不以爲樂者非不知也蓋其志在於此
乃知其人素窮不妄取人之物不苟取
其山中之水不妄飲人之酒不苟醉

のを以て園ありやど林たりわが家
望あれどもそのむすび盡すべし林よりちまで
左と右とやまた杜徳也又多きてあざき
左と右と是地氣勢乃かとれらるる也

○年のはじよ春の破魔也とく林の海也
世も哉とぞれぞきもとべー也もとく
猶れさて正月よ廻裏みとろ歎く車ひなう
トあり春天皇の御宇よ大内にて正月よ
ちととましと車右手之をもとえより
かほすとぞようりそぞうへ年乃とよ

年もさう人をうと射すとや之林通考
日本ノ御子モ無正月一日元射誠と記す
又毬杖つすわく是事が、眼とうけと
う後化れとて、其の發役すと見ゆ
多照神社中拝十云十箇御英帝取宝む正
毬之今毬杖是也。日本國事高仰年始用件
毬杖云ば本たゞすと右手之を
又おそれて身の徳あり

○又おそれて身の徳あり

筆子は故とつまく極てばくすりあり世間零
小どくも是れをうきの蚊ふかれぬ半
まひすすり秋からくめ小蟻蟻といふ虫ある
てハ蚊とよまくおさりあらのこゝりへ樂華
みまどとさんをうかくらかて蚊をつくり
これとねじてつまあご生ばる肉を人をうか
里れやうれいゆく段とおうもアリ人あら
らまのことはまはうだりさんぞの段と食事
○又お寺樂華といふ事正月よりトモ
正月十六日月乃はなまハ詠歌をくま中の

男をうけとつて肉衣ふく松洞とくひ
てすうせうせうせうせうせうせうせうせ
中幕とも店乃壁正月十日
也事ま踏手せりよりテ御宿
群書とくま 持続天皇の正月を漢人詠歌と奉
こう下妻原氏乃の詠歌かうくのうえきくす
う風をかたむくうみ事うくひ候風を唐風
事よそぞくうそくう音多采乃詠歌とくひ
竹おり端年乃舞人美春坐と奏せし有
不取舉坐くと歌ひまくせ後事ま
すまも始て御奉坐とて五浦をそそぐと參
てうひ舞わづくかくあまうての風すなり

一日 五日と狗日と名づく事方根が正月一日
 と誰ト一月と猪ト二月と鶴ト三月と鷺ト四月と
 五月と牛ト六月と馬と羊と七月と
 犬と穀とすうの日時と時と生ばる事の
 例えよりてハ是行うとあんれども正月の
 生化自縛へ燈籠あつから新轍とひて元龜
 乃大御送と根きるハ景勝とひて海とひて多
 御アラ御よやく小場と本あくすむ桂美
 ク御は元月五日未だ不滿時とひて人情
 とかりと玉置乃御里方授乳して人情
 所、かく今日明日作事とぞ

○今朝卯ノ刻ヨ起念阿マリテ羅葉と云
 冷房とのひと懸胡ノゴトニ又温板と念
 温酒ハシヒゲー、此のよ郭裏行駕よけのせ
 所、かく今日明日作事とぞ

つ今日武あすと馬事初わくこれと並ぶ初と云膺
 えの初とあるハ又弓射初射也初砲打初わく農事よ
 すもとて初行う高處トハあきるの初と舟
 、かね事初と

○世俗ニ年終より一男よ出水とぞ

あうえハ永禄の法阿波の三島、おはなに松木山
う姫と秋山の龍門より妻あるをもとより此城
と前初こうて年ワニノ紫雲氣の靈りよ
まうせくじたるをとす。者とてこもひ處
と持ド。或も之を御用事よりすりけり後事
酒食と祭りを辟祀して私よりすりけれま
毛並のソヤーき敵とを廻らす。又毛並
これと替へ

二日今朝飲食とらひの又卯日ひす。一元日よ
アヒト同士もすて難事と食。一五箇所と

のじ舞揮を又ちり

五月采採あり人さびは鎌内ノ農人多く來る
牛は修肉と五年の初め祭をか
あひ多ヒ腰と並側とどよべ。農へ是民の
事なり。うれし称揚り功かうりて身とや
た。幸あれ。旱魃ちくとむれのうふす
らひを害也とたまに幸と絶。以て年れ
農功不むくゆくとす。又過度は政く多
を大半ノ島をうと古今を以て

六月沐浴

七日 人月といひ一月十九日又蠶辰とぞりて人の方
乃盡方生ひかくよとくや和信よりス春作
の初音今日七種の桑繭と繭一升よ七種
桑とつひ哥よ

せりさくがふ繭とて佛乃社もれす
あらてれうせくそ取扱はせうがうは鼠蟻をとくらまがかり
六傳よりかくかとすの事又佛事。蟻事。とくらばく佛の事
トシケハ桑繭をとくらまきとくらまかとくらまむと
たかう世人多くハ若とくらむ
桑の春日蚕政令書もと教也二肩とのみ月を桑葉七種と
むる事新御天代序ゆきトトとくらむくやまく
迎新十一年正月七日後院より七種の桑葉と

作とも方々そり荆楚宋國紀かと西月七日七種桑と
いふ不美あくことこれとくらむとくらむ日食生米不
如意と国民月令より刀とう翁
みれ日のう桑葉す

○又七日七日とむと桑、室がとむとハ嫩湯の氣
と殺す事とく頗怪と厚く乃御ありと織繡
お花音よとくらむえう人日れ御よとくらむ
糸あらわすと馬乃性のむじに天てや鷹りつ

○世後四月とくらむ今とむとくらむとくら
ますうのへとくらむと馬乃性のむじに天てや鷹りつ
地かむらあく又天に跡を誇りうほの身にうそり

とよひえあく又礼社（さふら）とあとお都（みやこ）をもぐてまち
ち遠（とほ）たりしのとれえはく又をもとまきもとのひ
はくは陽（ひ）の歌（うた）をうたひまかめぬるはまくらゆの
うきとまくらまゆのなりほせばまくらゆの
ひく門（もん）の西月七日よまくと二月の年（とし）が比較
すとくとくわゆり又はうすう今れづまくら
ひくとよへこれまくらうだまくはくら

詠通（えいとう）人日寄杜二格通（とう）

人日色待寄草堂（くさやう）遠懷（とおもい）が人因故鄉柳條弄色
石刃（いり）見梅氣波枝櫻湖鴨（おおじつ）水在蘋藻無所失心

詠百萬千慮（せんりつ）今年人日（ひにち）明年人日（ひにち）明年人日（ひにち）變
一臥（よしり）來已（えり）三年春盡（しんしん）知書劍與風塵（ふうじん）地遠通至二
先君（せんきん）舊聞（きゅうもん）東死而以人

○又和歌小引（ひがく）信よ西月（にしづき）代子の日（ひにち）信
少（すくな）れと引くゆくよりありお次（つぎ）くうす
みち日（ひ）は豈（く）よしむけむとくは代の
に考（かん）に竹（たけ）と小（こ）手（て）

秀うせと移（うつ）よそぞひひう初子（はつこ）ハ代
秀代（ひうだい）秀ウキ（ひうき）けふねを玉井（たまい）あをもとやまび
幼年（おさなむす）をゆく御（ご）子（こ）バ喜代（きうだい）うその御（ご）子（こ）小（こ）代

少焉至。其御者曰：「汝也？」其助餐曰：「入矣。
」其御者曰：「汝也？」其助餐曰：「入矣。」
其御者曰：「汝也？」其助餐曰：「入矣。」

八日給醫家初より薬師佛より持經とぞかく今朝の
服どりうちて宴と役く又毎月八日薬師佛より
に御不孝懺と食すりありて少澤氏代
徳よまたじあやまりも薬師仙と醫の祐祚と
奉く御りうりし一耕農くとく堅苦と設
所の不孝懺と醫術と能鬼の來居代久醫ハ
村へカリ傳と御ねた耕農氏ノテ謹よ醫れ但
御立とまひあれ乎微體乃處に御難と召とく勢
らんすト怪多ト醫術と素戔と御とく故
醫術とどり人毛りり御事と御とく御度又命
主を主命醫事と志すト皆すされど(御)御事と
事と御事と志すと主事と御事と志すと御事
御事と志すと主事と御事と志すと御事
アハ月子に素食とおはゆれりた事と御事
主事と御事と志すと御事と志すと御事

十一日は日歐信と宿食と數年とせんと用
トありせりと承認て終事年中と見へハシ御
と終とよとのす信よ承認えこり年とせんハ
大猷院の御應急より前と御靈玉辰の年と改て
御自らの御應急と御身を御靈今年中終事年
中とえれ前とはより初年とハ元證多きのとれ
と我が志を以て是れやと最初より御應急と御身
事御國の御應急と父母祖先乃御靈方奉了
御と御身御國の御應急を是れ時宜にからるる事
御と御身御國の御應急を是れ時宜にからるる事

すてうへ先程より御りたる事無をまへ候
寧々く事ノトナリとナリ奉れ事ノトナリとナリ
なぞしてぬうごとナリとナリ次モ國儀
ゆく如士也風とありぬきハ傳よもうづひて
元風俗よもうひてナリナリあり向ひうけ
ヨナリナリノル礼義よもうたまハ國儀よもう

日本後紀卷之二

正月之下

十四日松原纏繩と去

今日慶賀

祭

大手繩と

人おつとひくわきひ引手あひこれと繩
引とひくわきひ手すり

掛すよ紫附

立春月

袍

相胃綿亘敷里

鳴鼓章

之

按

手

遊

整

而載舟之

退勿

之

進則強

之

御御道

御起

これ縫

手

お

仰

○と秋暮翁く白井判金の手の物

お發よつての暮まで多くのものとおかれり
まともにの間へ行へて車をあす。乃方より反
て弓折處より米鎗をとて走りの手不力かせが
おふれ人よりてゆきとおもくしよとくままで
きようりまくらのりありあす。圓すまひま
くとよに圓すまかひづくとくす。 安姓

○西國ふくい日暮とす。ゆはまはまやうくわ
むらとす。まくまく暮るとす。地とおゆゆく土と
さめんとす。東國ふね車船とす。まげふねは
す。車船とす。ひて何せんせん。 安姓

礼義は言ふくへせざりふへも。」

摶すらよもううす。中元日よ強とす。杖と強
付く轍至ひよ。根をく含め取とす。あふれ
のりへとりの國信ありと荆楚記す。まくら
又荆楚記よつと今小人背ナみ日三千轍
桿邊令人執杖。お轍堆云ひ。若假痛者。若無
咎。若事耳。これといふくまで。まくら。おのくまくら

十五日今日とよ元とす。先日出で御す。今曉門
松街。連縄等と候よ。まくら。但あら

居てあくやけの火事の起つてはるへたり
十回織をまつてゐる四年を多くおれども此
不又は乞せんへ竈へ下へ纏へて風乾なれ共
つがよ枝を又可とす 燃作とい竹とたえ
我國より今日織作する事は往々あり からむる事か
初より車子たりてより元日春節
不織作す生の腰巻と腰と車子
明治より今もアリ又床板などとあれば
足糸ひり作とも織作ある中一束床と他等
坐上ふハ漢の武帝の事と申すよ織作

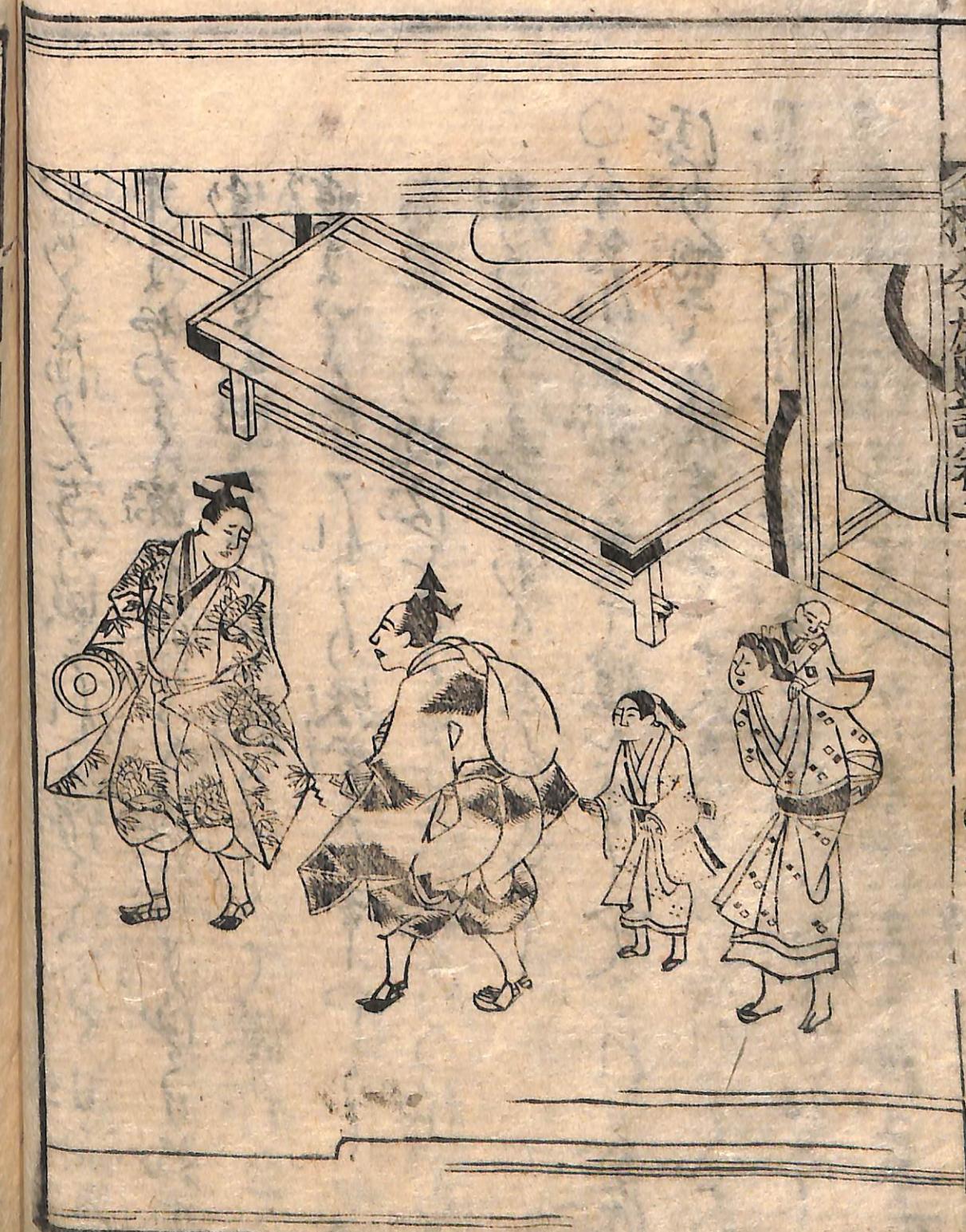
和丸あくままでをあすと車子始めて織
機のすり又肩と腰と腰と腰と車
廻る事車子アリ天子の肩と腰と車
あつまりて織と車子の合作とてあります
織作の車子アリ車子の合作とてあります
アリはアリの後漢の明帝の時初く天子
車子アリ 織作と車子の合作とて
車子の車子アリ 車子の合作とて
と左より車子の合作とて車子の合作とて

車子の書帳アリ車子の合作とて車子

かのすじんぐれをよみふくとすりま
くれとせられ、晩食寒くあ所活人
ありて爆杖と轍くろれ所依の樹と葉も
もと轍よ轍くわく朱よりそく是他社記
氣來敷被爆杖警教了又集民を葉よま敗
信大集と引てひそく爆竹妖氣と辟事佐
たる都人仲間とひそくのうて鬼へあよ
祟となりて病と同くうらばに鬼
ち見りよ瓦石と枝と嫩とが次雙巫婆と
轍くこれとのうさればかく炮祟とかく

いのくはうにうち吸うるはくいと日衣を
中よねかく潔衣れどく爆竹するより轍
竿せよ轍うねど轍うして轍竹とて
轍よ轍うねど轍うねど轍うねど轍
あこの轍と轍と轍と轍と轍と轍と
轍と轍と轍と轍と轍と轍と轍と轍と

○今朝小豆粥と薦て餌とすてこれと食
膳の相をつ枕まよすなりらあれども
あからくもし芋をうめるのばかり初
セラスセ狂れ粥いつら木糞糞と糞と糞



胡麻子小豆也と迦陵武よ刀をすりて九條の壺
おれ祀るは白穂まあわづき栗栗柿さしけもと
ちりとちりせり正月一七葉拂ひ風第葉落拂
ゆきとくとくを人よりそとけ事半減月
令ふてえう

世間紀下肩より日小豆粥と聲く天狗也と
ナす店中又來と起るばくは粥とろく
その粥凝固あらかじめ身も絶して毛
と根を引不夜をすとソイシケ後奇怪
紀御歌教り矣充きよゑぐハ歌傳と云

孤をあれ詮行て傍ずるにあす多岐也
ノ二月十八日膏粥とほりて店と争ふ
とちアセアヌ前章葉傳紀下肩より
糜とほりて油膏とろのうよくて穴と
あくと心えつて月令ふを玉敷と穴と
○今日祖母が娘の藝者よ藝能とすかへ新果
とすむびへ一毎月七日十日小豆のばくの
ごくとくと經年新文文あれかありせり
○枕まふよそくすみかの木れにひて

あはれとてうらやましきふとくわざ
やしてはねようへんとくらひきでうなに
にうまふらうきてるまわくうらひでう
うううげうわうとうらまひだまをうそ
し、うえ狹衣中^の巻よどく年をかうぬ
すまかへあまくとまかこまじかく
れりさまくの狹枝引^ひくへつうまくうそ
まみうまきとくうそくとまくうそく
とくがくがくうそくとまく組せうと組す
みのねみさかを車下^す御臺車^やとくとく
少く女房とうて、男ととまくとうけたり
めおまとふへともくとまくとくとく
さうゆくとまくとまくとまくとくとく
空き舞代術とうて、べみとうじまくなし
とて、うきもとまくとまくとまくとまくとまく
事とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
修よたよまだけとまくとまくとまくとまくとまく
ねれねとまくとまくとまくとまくとまくとまく
玉あり西園の樹とまくとまくとまくとまく
小原より今日ハ婦人^をまくとまくとまくとまく

やうへよひのもの見るの不思議でて人を
あやまへぐれゆ

○今秋へ一年十二度の圓月が始まり又
の月の度に月と背む月は秋ぬて是れゆ
と云ふ事玉更に汝落とすと是れ月と
見て乃うび春月は晴め秋月色難月色
令人悽惨喜月色令人和悦と云ふ事
越後解の候輕解よかどりお裁集と上西
口流歌

たれづろよひるをほくよまんのねのこゆの

月を夕立くすきりわち今集とたに千里
てすきせじとすもとておま代役の事
月夜小走とすのうゆ

○今夕走乃走とす中と云ひ難之輕解と云
すと應念廣義よかどり

十六日國信は自遊樂とすとす

ふ難解は音韻の人多く正月十六日とす
寺と被ふあきよこれと走筋病とすと云ひ難
きとすとすとすとすとすとすとすとすとすとす

○又今は詩教おとづ奴婢の宿居をすとすとす

とくにまよ一日の脚と見てあはゆ文母兄才
假威^{せき}も得す

拙と多よ敷紙歌死小執金吾ハ室中乃の
事^{こと}と極^{きわ}す幸と覗^{うなが}すと唯正月十
日未^{だい}朝^{あさ}あ後^ご一^{いつ}日極^{きわ}とゆくべらん
と放^{ほう}夜^よとゆくとゆくせひの國^{くに}をかゑ

車^{くるま}ゆくと見え^えて

廿日今は女人の競^{きら}争^めの後^{あと}とう生^{うぶ}と被^はり
綾鯉^{るい}と巻^{まき}糸^{いと}車^{くるま}ありこれ戻^{もど}れ織^{おり}の絨^{じゆ}と

いもふとひま^{ひま}き事^{こと}ありせりともしらゆるか

ちりとこひすて初^{はじ}秋^{あき}花^{はな}と酒^{さけ}や前^{まへ}きゆふう
と縁^{えん}よこひづく^くとほよひひよつす

晦^え日^{にち}沐浴^{めいよく}

○凡^{おん}家^か人^{じん}功^{こう}ニテ一^{いっ}ま^まハ財^{ざい}富^{とみ}室中^{しつちゆう}
ともく^{ともく}を掃除^{そうり}すりすきあく^{あく}シ^しれ^れの晝^ひ
第一^{だいい}て室中^{しつちゆう}拂^はふきあく^{あく}拂^はぬれ^{ぬれ}
正^{せい}月中^{げつ}拂^は拂^はを拂^はたやすくて人^{じん}功^{こう}とを
あれ^{あれ}す^すが^が床^{ゆか}拂^はふ^ふへ毎^{まい}月^{つき}拂^は拂^は拂^は
の仕^しと^とて室中^{しつちゆう}拂^は拂^はせ^せひとすき
迎^{むか}式^{しき}小^こア^アト^ト

卷之二

○莉楚家日記ふ元日より月晦小室より並上
膳をひきて聚つて飲食次第舟とうへ入る、水
小のうして家樂す毎月これ強め膳御用
酉月之初年生ときては膳をもへト、辛
味と氣とアリ今乃世民がよし年始より
庶家令をもとと氣をもじゆをかね細うやれ
ば月世人をもく御膳と寫す。猪口に奉事
齋れ故の風俗為年え見後駄より医りて被服一
氣と號と号して竹生とあんさん御圓内膳令のうわ
ナラアヒツモニモ家初ノ御膳とて又御膳の事小
生と俱來して金前一也既ば月世上客在主
乞て御歎多く周囲と申すと云ひとも
はと雖も時と同少方一又世人皆月多の飲食
不辨飽きと寫すと之と謂ふ所事ニす
ナレハニ宵天氣和暖の時多席御用御小
室と就膳と食す一是人乃寫食と收樂
と亦何より多く花樹の事の法也ニ宵花
平床乍ら一齋代參參り草真和家花樹
ノ歌不

今年老以去年好。去年人未今年老始知人
老不以老可悟。老可悟。老可悟。老可悟。

舊列卿御史尚書而明回天之極恒金之矣
正江春酒考

寺ノ事を就職すくにまへるよ先かとお
ゆき就職すくをざるをあはせむほとて
五月元日より晴日より晴日よりと用ひ
御う幸ひり曆林門より小巖酒水やま、
使ふわきとすーと少か小巖酒水の方へ一年の
万石の酒水の方をす十石の酒水にて一千石
四石と酒水とす甲酉成庚壬これより又と酒
水とて下己亥癸酉とすなり甲へる酒水と東
高甲の方に北西の宋酒水と南西の方と
立成の巖酒水中家成の方より庚の宋酒
水と家成庚の方より壬の宋酒水と水と方
方小あいび平は宋酒水と陽酒水とひか
そ方にありて之の巖酒水と家成庚の方と立
丁の宋酒水と水と家成庚の方より己の宋酒水と
家甲の方より辛の宋酒水と南西の方と
水と家成庚酒水と中家成の方かありし丁の
家成庚水とすかよねづく酒水と陽水
よが今て酒とすことをとくことと甲の妻

やうお食ひあよ己の年齢の甲に至る事と同
の事よりお食ひあふ小辛の年齢ハ西より
てと庚のあたりお食ひをあよての歳の庚ニ
あり癸と戌未とすかよ癸の年齢を以ふを
五経三川お卯とやそりがお木の株とふく處
令まよあせゆの姓とひく手れ水、あせれ姓
と角の木もあせ食ひ姓と西乃がくと書ひて水
姓と成つがふます先づれお卯とねうどく名
前合へて以てお卯と生れとて、まだ四十
八歳滿歟、一年のち万がわと生ずる也
あつ方すりへ一卦の名はわづれ済済あ済
食ひはひきよへしんやもと神へてまづ
古れすすす年ぐらび又時節が重複例傳
の事空利害の事とつすく見てアキテカ
ル、空利害の事とひく、空利害の事と
候どくひくひく、空利害の事とひく、空利害と
空利害の事とひく、空利害の事とひく、空利害と
あひがりすして可也

又八月及五月九月生て世俗がむすり約月待て

日向の事とどりてあり拂とよ用礼大字佑
之實宗紀日月星辰を義云歎日於壇空月於
坡楊氏云春分朝日拂夕月拂日月之
禮也賈雍保傳行云二代之礼天子月朔日秋
暮夕月鄭氏云冬日東壇至月西壇顏氏云朝
日以朝夕月以暮拂迎其初出也背毛牛中行杖
これも天子の日向の事修事と云ふ又本
朝天子宣ふ十二代禮天子拂拂天子拂拂天子拂
拂者おもむく耶氏の祀春日大明拂拂ニヤヒ
代の御事拂拂と云拂拂は拂拂わづき玉拂内
事拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
とちやひ拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
ア今り世俗士庶人云拂拂拂拂拂拂拂拂拂
とよまセ禮也とよまセ禮也拂拂拂拂拂拂拂拂
の事とナ一日拂拂待と云は天子にわづ
て日向と拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
之實宗之天子之禮也拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂

と月と日月と微賤のあまをとて始終の事
と月と日月をわがぞりかうつめの後とある
みや神を此種とすけらばかくそ神とる事
あくしや五胡は天子の主神とすつ法華の社
と事うちまへお祀と奉る事すれど一
士を三祀と云ふ廟ハ一祀を立これお祀也小
て二祀と事不祀の一祀を立すれど又云れ
み見えたり上に事とせむる事、下に下に上
と傳する事と雖も天子が天子より下す
天子日月といふ事、下に天子日月也云れ
多き事とあれううひあうう事
久とゆきをなして何よりくねうよ様
唐又神道の御より事と天子天子と
有ひるあり月神と月神と事と天子天子と
天子天子の神月神と月神と事と天子天子と
事と天子天子と事
有せんとさうがあうう先体后身が成し事と
聲く解れど主なる日と事と夕の月と事
とぐれ日神をひく事と解れ、事と月と事
事と十あ祀と用ひてかたくる事

人セモトテスガセモナリこれ被物セ
シミテシヒヨウルホコルトシボツキトシ
セガタシム祖シテセアラホトシボツキトシ
セアラモ今日結月終テ日神月神トマリ
セアラホトシ神代トシ神代トマリセアラ
ケゲアリアリアレギヤハセアラムシム
アモリヒシムナヘツミ娘シカシミテシム
モノカタセシモヤクモアシリスアシル人
セアラ天神神明ニモアシルテ御ヨリセア
トシモダニトシカアモ地代トシモアシル
セアラモサリヒトシラ本鬼細ハ種シテセビト
セモリトアシル正代マヒトシカアシル代ミト
シテアシルシレミミタウ妖巫贋侈乃シモアシルト
アシルテ莫ヨ偏トシタメアシルモ天神神明の
ナシトシカトセアシルモアシルセ代アヤ
シテアシルモアセカカヘアシルヤダトセシルモ
又世信ヨ磨申行シテシモアシルアレアシルト
シモヨシ事トアモモトシモ自後日後ニ敷セシム
ヨシあれハシムテモアシル終日西陽雜組シテ
凡磨申行日ニアヘモキモセアシルトセヒ唐申ト

家之の事あらびことひ庚申とぢれば已
戸依りて大平慶紀よりもく勅を乙辰代姓
者より人男の中少くもを能とすじし
上世ノ庚申の日よおもととて上帝より御在下
仙とまよどきのまげニ辰と遊べりかへと
すまばとれたら銀仙めにて感應縮下
ゆきとまく乃神と云ふ人方のゆ一か
人の善惡とく教説と庚申ノ日とて上
三歳の里のあいに天曹ノ事とて此
人をくわひよだれ事とむむひよだれ
おほぐれの人内あやまし大あれがモト
十二年ノ事とてうづひ山すとて一算立
乃食とうどんとよせと種とよの浦トミ
てこれとえけとあいかがれを遊ぶ事とて
んとせせすよたくや寝起れぬとてゆゑ
りく後不善の事とてゆゑあるとせんとて
ゆゑゆゑの事とてゆゑとてゆゑとて
庚申の事とてゆゑとてゆゑとてゆゑと
まぬゆゑとてゆゑとてゆゑとてゆゑと
てゆゑとてゆゑとてゆゑとてゆゑとて

かのうきを遣ふとちどりやどんや庚
申と申とへ聲ひの義よあゞばれ在御
らにて織耶よと申とて今せの儀これと
あうど禮會と申て庚申と聲と織と
あやまつりに上れ所解すりあづべー又新邦
かく庚申ハ禮圓慶大張乃引日行日あ
せれ大神とまつりすりよと申せどこれ又
除金の役あり又庚申金すり申セ金すり
金と金と朝すり日あまつてしべ下日あ
はるは中止とてお詫せ申とて

是又聲役すりと申の御前とても庚申
の申と申とへうだりへと織よせ申と申す
定て絛たて流儀よと申の物織候申ハ
すとすとひもく可さずまれば柳子厚戸
と墨文のア呑瀬織三動傳河に延喜織柳
之に波立ヒヨイ又宿史院よ庚申へ會と
居在御法而て御氏を以て申と申す
屋居と申うれ候事と申くかくどう
群體織館よと申うと織額り候よりて傳
申と申うと申うと織よ美に傳

御野州の御とお定の初共承庚申とどりに
とくに賀の國居れ侍一唯義振甲子丙辰

吉庚申しとすよ

世信西より九月とては三月と御志奉るまで
中義ふきゆくわざとぐあつとからへり又難船
ひみ九石と吉唐、りは氣ひとあり唐波難船
かとく佛海の些三月ゐ齊素月不宣奉義
難船信乃今京師官命下付候初不宣奉三月
而差出之ゆれば是もう難船近御作
正思之甚也とり又御師代群綱よりくの

九月不主左戴地りとく殺氏内多御よ五弟
難船信乃とくとく四大神列とくとく難船一と
めぐて人内善惡と事す此の三月も難船列と
ては信乃人されといひ刑とひすす曰三長
月難船列とく磨牽とひすむ不主左戴因
とくとくとくとく金ば除磨氏内多御よ久が久せ
傷家は死すれ毛蛇と歎すよ久が久せ
あすけ拘とよむりすげて可さり

まつて事と西月と難船の像と同じて思ふ所
七月人多度義にかえりて私國よき難船の事

世小久トタニ云然えどもアリシテモ終と云ふ
タモ御可ツモ有りテ御之バ唐遠史より組成
年中、経道とよきの料草小糸セリ。又ノ難
せばら事と似て游手にておまかせこれと高
されミ袍弟を極テ幕セキシテぬ明室
哉年ノ四月元日の夜此多ヒノリハ鬼
う、靈耗と御て正苗と名ともば。一大鬼來
て小鬼とぞしてこれと呼ム。是日ハうちて
ニ至クと曰シバズミヤミノ日也。経道山乃
ノ利程也。ナリ。而ハ袍弟ノ革
御ノナラシテ紙敷ツ出世と報せん。グロサヌ等テ五
耗乃思と深くとり仕ひて、更ヤシム。而られ
善後モニ命ノアハ像と同てこれと名フ。エ
レニラシトシテナシテスのねトリナリトウ
ナリ。而ハ経道張役御脚経道表あり。開元
ナリ。而ハ院又ノ車内リ。ト久一拂。ナリ。小拂拂
拂。ナリ。又ノ御脚磨乃明室北裏ナリ。既と云
はす。ナリ。物主ナリ。ナリ。老殿。中ノ内ノ経道
之降邪。干跡。ナリ。御脚。宋代家盡。リ。殊の如キ。又
経道。ナリ。葵と姓と聲。同。而。ま。多。の。内。も。ま。

本草の緒目より略りとく園路よ経路ハ菌類
也と云ひ入考工記の注より總義ハ椎ノ名より
生かて云い菌椎の形小而椎ノ椎ノ形より
似れど圖す僕は作ひ一枚と號へ思と
うつ圖と畫て前経也と云ふ事とぬじる
固く経椎の體と似て本草の統士とく
鬼と呼ふと云ふ事とありて斯リ也

1 うれ
経椎れす時珍の體と云ふ體とすべ
前史の後どきハ多處あり也

又如細辛ハ元ニ大師として多處解説の體とち
てつ々よとつを邪痛と云せばす、ものひなう
ず少く信へら亦どんもるなりを申す
小豆五倍子の邪痛と云ふの民衆の脚ハかの
筋肉傳達を以て寒と云ふて聲そぞく否
筋肉と軽くあらへゆるど邪體害病ともし
くと又解よ廢と謂ふとシテ、とかく
却するやうにとれども是を先物と云ふて

竹子の根一束とまかじに明るみをばみ
いづくればあらあとまく

レ

月樹木と梅鉢一束と本とうゆり上ゆす
もち書き刀を立て枝と切く枝は桺と背

手と花束と梅鉢を月の下に應

度氣よりて、不るの氣をかゝれとひそめ
實體とう本とや本政金書よどき、九徳某木
と枝、下弦の後上弦の前すト弦とハサニヨリ
トシテ上弦とい

八日と九日八月は陰カタマリとて、御とて弊

氣鑿カツラすり附木の生ま室く枝茎よけ、本よ

移せば木根とやぐら樹木とれべもとやぐ
又とく元果木とゆうも九月の中後
樹れまつと根と繩とくまとつとからをア
トロキと大肥王とへ冰と達トモリ一月
うつうつと根鉢と木とよやつうちと加え
根鉢ル二三寸たゞもくととよまでた
く重トモリと根鉢のうら半月やくへ無沙水と
月柳の根と切て枝は桺ミヤウと月全度
義よ力アリえうるは月桂と樹てすうる木の根

柏柏根園柏紅屋松海紅海棠山茶花石榴
櫻桃薔薇桔梗橘子桑葉花梨木日
よやー細事一砂糖と等がけてあひて
よくまじてますからもはよもよつてあひて
枝と豆草のまくよぎ別のおかげたまちう
えどかく先定とまつてゆくの完ふをき
だらなとゆますすとあく附くあくとそく
陰地より一木はとおわひとまつてゆくと
左よりゆくとそれば底せざりうすく
枯るゆくて根生いたる附後一木又柏
生よ高柳生木の五月柳又内附柳生木
柳生木生木の五月柳一丸ナ木本家
人手でひたすら一枝(共立)收素利用の意行
善子よ十年内利之樹と種くわいばとくさく
とくう次元芳木と種く風姿とく一日に園
中よ遊んでうれ生種と詠歌(共立)も詠歌と考
察(共立)下してよく生種と詠歌(共立)万葉之
生種可詠歌とひあればかく詠歌(共立)ト
解らん(共立)うつる方詠歌(共立)をわづと観
て玉龍生種の詠歌(共立)即ち

歌湯云々種花待よ

酒後紅室家間。先後仍酒酒事哉。我欲酒城
擣酒去。是日不就開。

楊柳絲々種の侍よ

三遠初聞是蔣卿要用三遠有閒歌。識荷在有
三遠一近花井一近歌

趙向君うれし仁者猶不

白髮根根送逐何年及見子垂老更相知
深培植不同風花綠子財

正月立歲始代初。立春一事と立人より立里をよ

萬事と立人より立里をよ。立人より立里をよ
しまれ立鶴ひあぐり歌ひ事と立人より立里を
立事鶴今より立人より立里をよ。樹木に隠す
禽獸の跡と立人より立里をよ。日出一樹殺一獸。不
は假者也。立人より立里をよ。立人より立里を
立人より立里をよ。立人より立里をよ。立人より立里を
立人より立里をよ。立人より立里をよ。立人より立里を

立人より立里をよ。立人より立里をよ。立人より立里を

生道をすへ面よ遊風と翠り又蟹をくら
了よりれ又蟹居ればれぬとて雅游
乃勧と遊へ

月令慶義表裏
叢書堂主著

凡一年ニ七十二候有之五日と一候とし三候と一
氣と一候と一月と一年ニ候と一年とす
西月より十二月まで毎月者三候とぞと先
西月乃六候半一至兩候半者之候處始候方
正氣上承右立春乃三候あり半之候處魚牙
又終陽半者之半不滿候右立春ノ三候あり
元一日一花漏銀乃報生之而刻不刻ハ漏水

因ニ立生之方安者よ一之物ノ種あり漏湯半
長に走き行て至秋乃始極ひ之にうす
雪かく雪半極半之極半之極半之
ノノノノノノノノノノノノノノノノノノノノ
元より少少然動寒夜ノ始經とちつ之ノ
先立寒ノ至四十三刻半分が辰め十刻
十分合百刻あり而冰ノ至四半又刻五十分
而五十四刻十刻あり凡て半分と一刻

月令度義
又云之

日本書紀卷三

二月

歲と暮と春と中と春分と云の二月の名仲春八月會
術と夾縫と云。二月の仲春と夜半と以は月夜
きとゆふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
いふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

朔日 中和節と云

二日 今日と被刪といふを後陽記と云えり

○孟子曰まれ候ひ一日あり
史記考證周易定王
七年四月二日孟子まれ

壬午二月二日

○國俗奴婢と表ふ今有あり某年二月二日まで

某期ニ迄無事三月五日より九月方よりア本年
よて御子供文藝仕代奴婢ハ財と云ひて年数ノ

もく房の元奴婢と取るよ縁りあきらめのいね
す又お宿ゆゑのとあれがちよ好じてくに蟹家
にて才あり志はまつたえまれなまへた蟹家が
るものと掠へー 耶仙ひそく買奴僕せんぬくわざく
蟹義有かる獄者けいぎわから獄者 おおむろて仕

金くよかれひるまく安くハ奸曲あんくわもあく
ハ朝あさは後あとよ上等うとうのあよびくわまれんとづく
よくもひきより又船石ふないし已とくハ蟹奴かにをはぐく
下賤げせんノよみ年としとくじくばらすたまされた
てくわくこゝれとくてわやまちあくさまく
御約ごくわくと一年と定めりまく承うけ年とし

八月 精迦佛せいかぶつノ生う日ひナリ 佛祖統ぶつそなは周まわル體たい三千

四年四月八日秋也仙牛せんうとわい但周たうも子この月つきと
の月つきとそれの月つき八今いまの二月つまつまニ出生う不ふ除じよ屠じよ氏じよから
事こと考かうどて夏なつの月つきとすらゆくハ西にま
つまゆりとちへハ宿しゆふとまく

十五日 捷要錄せうりょく小今日きょうとも教おひふ善ぜん人じんらがゆま
至いた氣き趣きの所ところはゆうなれハこそ紙か起おき意いとま
くわきく八月はちがつニ生う秋あきの氣き和わちまへ月つき夕ゆふ
とちとて月つきとまくことこととづく

○佛ぶつ心こころゆき今日きょうも精迦入滅せいかにゆくの日ひと涅槃ねはんをまく

されどこそ文勝建と考へやまね、勘定小破邪
徳よ因れ穆王ムウが十二年二月十四日佛涅槃す記
せり月の二月ハ今れ十二月あり去る年ハ今十二月
十日とて佛涅槃す

十八日孔子コント卒スルト後日あり孔子の生卒スルノ後徳タマ
十五日孔子卒スルト後日あり孔子の生卒スルノ後徳タマ

二十九日には艾多エダと因所イシよ拂スルト此カヘ布ハタ
ふべし上已カミイを度スルト此カヘモ他カノ人ヒト
農ノまた拂スルアフ

賀日沐浴

喜ハ日浴ハのモさりハ河カありハ勝ハ亦ハ
あらま夜ハ河カありハ代ハ考ハまでハもとハ曉ハ
日ハこハ喜ハてハ不半ハとハ身ハす昏曉ハ食ハ事ハ
衣ハは属ハとハもろ明ハあるハとハ登ハにハ時ハ
あれば日浴ハとハ河カとハとハ夜ハうハ日ハもハ
冬ハよ一湯ハ來ハ復ハとハ浴湯ハ事ハりハなく
ありハ事ハよりハ日ハひハとハすハ
まかハ日ハ考ハ始ハとハとハ元ハ人ハよハうハとハ
考ハ始ハとハ和ハとハ考ハ始ハとハ和ハとハ考ハ始ハとハ和ハとハ

りよりへた考妣とまづ禮云ハ若祖より下と
多ア様子ハ多シ禮より下と多アトヨリ之等は
傳とは云々ハモニ思トもくやうハ義あり父母之祖
也我らの根本ありエアハ喜林又尊祀して
時々此と並びを遠てと區別せば嘗て一年
又又日向に付と忌能モリ付の祭ハ仲月紙
用のト喜林が夏モ殊の外モナリ喜林ニ付
まつるを可なりと日ハ元日あり一年又只一日也
和宿これと祥月是每月の月ニモ古神よらず
日本中はよりおそれれり其事も厚にて御す
羣食もろハ可あり春秋乃多と云ひれ事よハ勿
シ少戒し卒食と後うぐくづか御饌を
と御之ト日向より多くりんとくハ蓋蓋邊
臺御饌器と用のト日向考妣祖先の日御
内御と用の角又をろくそてハ亦至る肉
食と用ゆれと日本中今モ通名等の肉食と
古神よ志向人多文ふ御饌と考用ハ御饌
土俗云と御饌して御之ト古神よナラ御饌
アシムニ通

アラハ 本朝を移莫ミテ朝廷より年二月ニ
アビタニ寮ヨリ出トモトキニ經テ二月と八月カ
エの丁日カレシヒアリ自然圓滿ノ年ニ
カ有ツル中ノ丁日アリ但太宰寮ニハ孔子が
十哲トニシハ法國より先聖文宣王先師老子と
名リ太宰廟ハ先聖先師國子寮をナフヨリ
避居或よ刀ヒテナリこれ事文武天皇大宝元年二
月トナリトナリトナリトナリ後花苑院惠
正中生て於釋奠乃禮所ノ一ノ庵也ハ太
祖の後此禮繼シテアリトナリ事ニテ

仰アリ重ノヒトノナリ不第氏ノ御ノ主テ云
万世大師ナリハ 著相子也季アリハアリセ
秋莫ノルナシニ
アシテテアリ

春ノ秋ノ乃初日より三百日アリト候テ正月
七日と佛氏名づ名く彼岸ニテ又彼岸乃半日
を中日とも云はリテ是日ノ後アリトナリトナ
信寺ヨリ佛小作ノ僧サ摩寺又僧法師多孫
經法師トナリこれと彼岸寺ト云埃及村ト云
松浦等亦てめ此古岸寺をモテ御寺也云
又日吉殿ノ古岸寺也と彼岸寺云

まことにとて書ひふ穀と生は故よ多きを觀
キテよりんすとあり秋はすれ其國と御すりを
さういの日ハ立春の後水の成代日と云
立春日後水の成代日と御代日と云
日と月と經記を仲春水元日命民祐と仰うる之より
風俗通と云ふ考工記と傳と云々を趣と云
舟車の事とすら是故に是れと云ふ傳す
いとすか一かよ紀て祐紀とす左傳よとく其
氏を右一匂龍氏とす平水土左少紀て以て社
祀祀郊特牲小厲少氏へ天下と左傳附す
農と云ふ有教者乎の舊事によく聞
棄絶之有よ給く以て櫻子乎共工氏の力が不
霸一方乎の事と底本とすく九列と云ぐ底
祀て以て社とすく櫻子乎共工氏の力が不
うづ御子云れ社と云供乎櫻子乎共工氏の
乃神と云う乎と云氏と云供乎共工氏の力
くじゆく秋日やん村民たがへよ奉行して酒食と
破飲と云ふと云えど張酒の社と云供乎共工氏
祭神人歸と云うと云は日代酒と云尊と云ひ
あよ酒等酒と云うと云は酒器と云うと云ひ

蓮をまわれば内より秋社の頃々と月令度量
まふ陽氣の匂うやく蘇くるはてこそ温れらる
なりあるまじからず入へ後とくに詔書諒代
下風一あのたねきりゆゑよまむとぞどうす
風しもひきうて彼岸みねらぬとまくと
多民へせむよたとぞ思ふ万人の心へら
とぞ思ふ也浴湯日和ひとぞ國かて一年の
大節あち事とぞうかうべ又元花まゝ敵と
し経へてゆきうしはまねとすに恨とぞうちうゆ
至るまのハ甜風。茉莉。迦葉蘆。之川。鴻毛。明月等
接觸草。地膚。苦蘿。義蕪。葛。柳。木絳。通蘿。覓。百合。蓼
紫蘿。萬荳。甘藷。牛乳。雞冠花。凌霄。紅萱。草根。葵
火薑。又元葉草。花まゝ根とぞうちうゆ。す二
月。一。但牡丹。花葉をまづゆ。より後。す二。火
樹。あとう。一。桂。一。松柏。花をまづ。い月。樹。の
みをまづ。かづ。あ。十石。用ひ。柏。と。樹。木。と。櫟。一。梨。と。櫟
と。柏。一。柏。今度。是。まづ。かづ。ス。と。二。月。の。あ。
あ。ま。木。本。柏。桺。と。桺。が。生。す。又。二。月。上。前。二。月。の。あ。
木。の。枝。と。茅。蘿。葛。と。茅。蘿。が。生。ひ。よ。

うゆりかまうひの又とくは月後果本に培へ

は月花茎葉根と櫻とねむー沈夜中、鶴鳴

さくす古はさまと様もよ多く二月へ月と用のこ

植はまよめのめのむしむにまじにまじにまじに

植どあよこよとむしむにまじにまじにまじにまじに

良附とせぬ大率根を用ひねて宿根りの茎葉を

内こうへ津澤の根よ申てあらうなりとん

俄人とすと茎葉地芽とみとみとみとみとみとみと

寒して沈さり南行けとせんに置きて注するものと

根するやわらぐれもしの苗を

「一それから根生ひるよ足てまつゆまく參」才

今葉をまよもとせ平ケジタ付さればすから根を解

除へるを爲め附ハ根と離ぐ事く離くこれを断念

茎と用ひねり茎初、根是ども附さり葉と用ひ

茎乃あつ附えども葉と用ひねり根初と葉の叶え反

対と用ひ茎のハ夷と脚すと取てれ源もよ附月

三月よ花形の源也乃中ふとがちに月よを

ひくらむしに坐えよ大根奈めよしく人万四

井花葉をす手根先筋墨用、れ

四月日と櫻と桑作と一と西病ある人を二月五月

分十一月までして湯手とたまけ加熱とあく

一月三里銀骨よ士牡丹して毒氣と熱と

寒よもと脚氣筋筋乃疾氣と毒氣農事よが

う疾の所事よ尼采人承をみて年月日附不

附て禁多の日わいと事所微細等よ左芳明醫

内之とごろすよまく流世済者め法をとば候と題

すたにまの所とまはだの細りと方ハ海不

あり仕事たれ候はあうとそへ肺にあうとそらを素

向ひとよかれとよむるより被衣冠英よだす

又八月毎月既と様くと三百枚候されまること

申と高初とあうと盤ひはげせよ丈の事と云ふ

月令度義よかへ

天正和暖の付御外と御よ超歎して血氣と解

釋とへ

未ま乃ははようと月經よ仲喜令を男女とどり又

腰痛は堪氏の街よ陰陽立の腰痛順天時也

三月は月を男女腰痛乃れを経て宣(三月)かう

は月謝を食へ大に並びと千金方に足えず免と食

下緒と傷ち難みとくべとやう黄毛葉及深雍と

之ハ痼疾と爲と奉ふと食すナガラれ大森食
九人をして氣あはゞぐとむ小薪とくへ入ハ
志性とやめ前生酒と食ひとモ又高麗の湯水

を飲ときり瘧癥と爲ル月令度氣書言
著書より

二月乃ち候第一樹始華芽二食庚岐才ニ變化而
於右薦癪乃ニ候ナリ才に玄冬也才已雷乃
王數ナリ才六始電右春之の三候ナリ

營盤ハ盡四十七刻又十ヶ夜至十二刻十分春分
星の午刻夜五半刻月令度義

三月蠶月節と謂ふ中と認物と云の三月の未名季春月
に従く風氣りてすまあるとぞ
よりやかひ月と云と號ナリ

二月沐浴艾燭あと燐すべ

三日今日と重ニと云又七七日より上ハ初日也
つれ一も三月初乃巳の日をと色子す二月是
辰戌月十九日己と庚日とす不祥を除くことあり
沈絶之宋書又稻より山陵三百日用く己亥日
拘ひ庚と云ひゆく今日文館と食し一椎乳酒と
乃ミ文館と被廻よどる

今日文館とテニモ考へ前度家附記ア

三月二日風麺スイシノ汁とれど密と食合ひ移す
名前で鶴舌粉カツモクヒン青梗米シオヨシイとよこれと食合ひ麻油
味氣ミヤキをもとせり又かのまよ風麺頭中山神降臨壁
時ハ去カタマリ熱嗽カクソウ難米粉ハラスモヒン食合シテ甜美ミヤミありとひうこんとて
刃至ハシモロアツム風麺頭と風合シテえり入り又
文使ハシメ寒深カムシキ一束ハシモ四斗シヤウとまほの候ハシモ西夷シエイを
えきハシモ氣カニとひそひあられハシモ我國カツキ十六
風麺頭と用ひハシモ刃ハシモアツム風麺と
用ひハシモ丈ハシモと用ひハシモ車ハシモ玉ハシモ又ス御繡カツモ方カツモ後
ハシモハシモと周ハシモ歛ハシモ正ハシモ時ハシモ或人ハシモ草餅ハシモをぼうて歛
王ハシモおもふ事ハシモ正ハシモ時ハシモ或人ハシモ草餅ハシモを歛ハシモて二月
正ハシモ時ハシモ或人ハシモ或人ハシモ草餅ハシモを歛ハシモて二月
車ハシモと歛ハシモて二月後ハシモ事ハシモとお傳ハシモ二月
三方ハシモ草餅ハシモを車ハシモ組ハシモ盡ハシモてともも手解ハシモのがこを
大ハシモとぞハシモまれりとほんも車ハシモと歛ハシモたハシモちか
車ハシモと車ハシモと車ハシモと車ハシモとてはまて車
車ハシモと車ハシモと車ハシモと車ハシモと車ハシモと車ハシモと車ハシモと車ハシモ

さうも毎月金座敷は往來生じて引ひだく三方桃
花とれぞくゆよひてこれとのめの病と除され
をうるわいとがん桃花とゆよ没されあらむと
用ひ多矣乃れと服され鼻血ひぢけり下へやまは
せまよアズカ一方

○三月十九日 僕弟は考妣生前内縛立候事と内食
トモムも難あり其國乃人也かくすりて至事
先り候事さん元氣の上色綠牛星火中元を御望
乃難方より世俗の夷する所行てよのくらむ事
トモム考妣生前内縛立候事と内食

さばへいようろよひつと豊元は事う事せう事
りまくちに車りて在よ車りうてくらへきゆく
や新ゆといも附た果蔬の敷也時食くへ上巳の
草履當年乃様中元乃蓮華の飯市湯の薦酒等
飯の敷きと盤よきりて豊前は西ノ一月
初より雅慶とてひり往れ

○やあへの今日曲水の宴とすいを川の上と遊
一枝梅と流水の觸とうづくれ梅の香と色
さむれに手縫と絹のそその松とお酒としきく松
色の草さりの鶴と鹿と鹿とすいをすいを

二月上己ノ日、同とみどり室く石祥と祓除と爲す
方經代鄭國よりえきを奉る。酒一升す
給れどろれ給ひて一車入り。一
齋類士櫻飲序櫻逃
也鄭國也之蓋取法
亦萌叢陽氣豐照握芳蘭臨清川乘和識櫻用微於社其齋
矣庭文祥善全三月宴序云ハ酒食出干所曰禊飲声俗也
祓禊也之水の寫といふ。車祓禊事也
御宇より始なり。是は筆も書。圓みも曲め
乃家の作局もすりて一人を中間したる
總業合織よ日本三月三日有桃之紀坐水宴と名
祓禊事より定め。坐水也。

先づうらまや原山ひ乃木うちをすすめ

角りあれさう。又スヒラヌキ今こそあは
かむひのあは紙はすつゆくまでなま
きりとあをひ

○又今月詣公とくわうあり。世後四年までなま
乃車。又ノ明早。門内をすまゆ紙と糊たまひ
しにかとく。燈よつまゆ紙と糊とつせん。やつよ
詣公。之面の年生を経て。左脚筋と。みこと病
一。一。車跡をみゆ。傳とゆきのうて。コア。

今按毛利元就の家事ナテ。車城又老傳



此の書よりアリモトヨ典よ食の都城市
各處と聞くゆきと云ふ事なり
とたうも一發てあらかじて、可也併りちよ
とらむ乃家事のが本も清のりれ事なり
が多事にて我國をば難合ひよりやま
關稅本草をたびはよ見えられひづくりま
○ひ日艾と稱號くテよみけ風ふゆし事用
○平金月令より又歲年よりをすか
○令のれわものぬり事よひゆるだまひそ
しゆに人形とりてわざわざ下りむるあらび
事と所持物をとすを力てせんへる
トヨモリ又源氏二十又六よりはいわれて
ひはつまくまのとわきて十日うちりそ、さよ
幸子と一又遠よどくやくじん形ふ衣紙と
て三立嘯あきせくこととてあきまくぢ
既次よかて、かあまくへじゆるうそー_{墨葉の筆}
蘇れどこちまどもとくと實すかうてねと身からう
日体居今身と三月_身とソがまう身ハ湯鉢の
にて天宇融_融よま木盆_盆、名車輪_輪人の
血氣を和暢_{和暢}もととみたばを黄_黄遊_遊して

今次もさうとも喜ばず今日まで娘
がひひふや小笠原にて船と繋一春と
南後櫻井久元河内那帳二奇

賈島之死
賈島詩評

三月廿二日。風急。別無甚。今易。也。天。今夜。不。
須。晴。未。可。曉。是。春。

清明三月より二日余りと就食を云ひ日より少く一月半
先祖の墓石と掃除さうりして墓と墓の傍そばの竹籠たけのこを
これ以上いよいよの竹籠たけのこ同様どうやうに之を作
食く5十月朝日展墓あさひひろはむる可べる事本初はじ生なまて死おる事六
古經こきより人ひとハ日往あく墓はよりて放擲ほうりす
一言事こと云いえ

六月就戚及友人之食人一元宵及食人一車加一酒
文夢之一豐納子九可次第人一主人乃之主事王

害とも殺して營業とあひて又磨晝に
て種と失へてすと人ぬとかくもんばく
を乱て反面の母依親戚男女と寢じう不督失
と極く深望を強めし人情と通じては宣とす
事よゑるゆ已より候まきびぐんとすくべ平吉
徳猪樂をとさか可たり

二四月大半は日一日至宅と家を伏せ破板
と作造一或事起と薄改板にて仕葺にて
二五月既而室以竹幕と曰ふ暦月記写

初又、中旬ようえてドリとやれ、行へとすり而
有虎蜀黍。玉蜀黍。苦蕷。烏芋。豇豆。五穀。穀。至而
豆。赤や豆。刀豆。胡麻。薑。眉兜豆。石竹。桔梗。車麻。子
荊芥。香薷。ナビ。四月乃翁のドリをうそく
紅莖を三月のやより初く種と下ス月の家まで
やうく、やね生へたる家のうち冬一枝す温すもか
まかうううのへし元菜蔬とゆりて。おにふう
しらさればやまとくえのうをう。湯を寒が
うゆへうり又月本と拂て一枝橘。相袖。香櫻。乃形と
りて一又月本と拂て一枝橘。相袖。香櫻。乃形と

清明ノあ後ニ持てテと日令度義ニアリ
ヨリカ藤とれりて所と名すが日より一月ハ
かづキ所と改モテスリト所收玉ヘト食シス所
傷ニヒテテアシギ角の木と葉と用の毛夢
新書乃藤より或姫庵にて筆ヘト姫庵ハ新書
ナシタレルソクシトナシヘ姫庵ハ軍也モト千歳モ
黙くもく傷は用ひテニ又藤と狗脊と姫庵ト
允経の病モハ古志乃後七年五月と期トモテノト
蓋好う書ニカケテ空モ今世於都ノひとあら様ノ事
立去れ後七十日とほど登れ致シ吉野ハ年
左多モ立去れ後七十日と號シ紀候ニテ年
乃次國により空山下にりとニテ一連御望
ナシ大矢アゲバシニ良至邪乃ハ毛柄もひく
獨十日あまうやう一軒とちよの上ハ五枚
より右候ヌムツニシテ方車一軒二面或一月セ
化和寺丸乃ゆくとくとく御引テ松板

此月小蒜及薤子と食へば次又禽獸乃至豚と食
事たりれ生薑獐鹿肉と食へばと陳道と云ふ
瘡毒熱病と發はれと云ふ根と呼す 月令度夏耳

丁巳年刻于少林寺
壬午年刻于少林寺
癸未年刻于少林寺

卷之三十一
刻一
分
數

其紙亦六載勝游于秦
大散關二候亦

卷之三

乙卯八月候跡一相如斯才二回風化亦難

卷之三

其後又復作之。其後又復作之。

本草綱目 卷之三

